

2017年4月27日

2017年度第4回Jリーグ理事会定時会見 発言録

【司会より】

18名の参加で理事会を実施した。20分遅れの開始となったことをお詫び申し上げる

《決議事項》

1. ホームタウン追加の件(横浜FM・徳島)

横浜FMのホームタウンに大和市を追加。横浜市、横須賀市に加えて、大和市となる。

徳島は、これまで3市4町だったが、吉野川市を加え4市4町となった。

《報告事項》

1. 2017明治安田生命Jリーグ後半日程発表スケジュールの件

当初の発表で、発表できていなかった後半戦のキックオフ時刻、テレビ放送、チケットの問い合わせについては7月19日に発表を行なう。

2. 後援名義の件

朝日新聞サッカースクール

百年構想パートナーの朝日新聞社様がサッカースクールを行なうため、Jリーグが後援をする。

《その他》

1. 明治安田生命Jリーグワールドチャレンジ2017開催決定のお知らせ

夏の国際大会の案内をする。大会名称は「明治安田生命Jリーグワールドチャレンジ2017」

【開催概要】

| | |
|-------|---|
| ■大会名称 | 明治安田生命Jリーグワールドチャレンジ2017 |
| ■主催 | 公益財団法人日本サッカー協会、公益社団法人日本プロサッカーリーグ |
| ■主管 | 公益社団法人日本プロサッカーリーグ |
| ■運営協力 | 鹿島アントラーズ、浦和レッズ |
| ■特別協賛 | 明治安田生命保険相互会社 |
| ■出場 | 鹿島アントラーズ(2016明治安田生命J1リーグ 優勝) 浦和レッズ(2016JリーグYBCルヴァンカップ 優勝) ボルシア・ドルトムント(ドイツ) セビージャFC(スペイン) |

■対戦

[第1試合]

- ・開催日 2017年7月15日(土)
- ・対戦カード 浦和レッズ vs ボルシア・ドルトムント
- ・会場 埼玉スタジアム2002

[第2試合]

- ・開催日 2017年7月22日(土)
- ・対戦カード 鹿島アントラーズ vs セビージャFC
- ・会場 県立カシマサッカースタジアム

以上の二試合を開催する。キックオフ時刻は未定だが夏季のため夜間で想定。海外チームについては配布した記載情報を参照いただきたい。

[村井チアマンからコメント]

今月の理事会は、昨日のAFCチャンピオンズリーグ(以下ACL)で浦和、鹿島がそれぞれのグループでラウンド16進出を決めた報告があり拍手で幕を開けた。幸先の良い一つのステップとして始まった。

Jリーグインターナショナルシリーズ「明治安田生命Jリーグワールドチャレンジ2017」は、Jリーグはかねてから競技レベルで世界の水準に追いつくと話しているが、Jリーグのトップランクのチーム(リーグ戦覇者、もしくはリーグカップ戦覇者)が世界の強豪クラブと真剣勝負をする機会が必要だという認識で準備を進めてきた。

ドルトムントはブンデスリーガで3位。ドイツカップではバイエルンに勝ってファイナリストとなった。セビージャはリーガエスパニョーラで4位。ヨーロッパ5大リーグでも上位を占めているクラブとの真剣勝負は楽しみにしている。過去にはドルトムントと川崎Fの試合で敗れてしまったが、あの試合が契機になって世界との技術レベルを認識してから、川崎Fが変わったと認識している。世界との真剣勝負ができる喜んでいる。本大会も明治安田生命様に特別協賛をしていただける。明治安田生命様はJリーグ全54クラブとパートナーシップ契約を締結していただき、Jリーグの理念である地域密着に大きく貢献していただいている。

Jリーグの理念で3つある中の3番目は国際社会との交流や貢献がある。3番目も協力していただけることになった。理念の1番目が日本サッカーの水準向上で、世界に追いつき、地域に貢献してくれる明治安田生命様が、世界とのつなぎ役も担ってくれる。言葉がないくらい感謝している。

この好意に答えるために、鹿島と浦和は全力で世界とぶつかる様をみせてほしい。

先般、今日の理事会でも1時間半くらい時間を費やした大阪ダービーにおいて、ナチズムを想起させるようなフラッグが掲示されたことについての議論を行った。今日、G大阪の山内社長に来ていただき経緯と今後に向けた方向性をご説明いただいた。またグローバルな総合法律事務所にも来

ていただき、本件が世界でどのように受け止められているのかについて論評していただいた。そのあたりのプロセスについて情報開示する。

《G大阪から掲示いただいた事実経緯》

G大阪はすでに会見を実施した。重複する部分もあるが、改めて話をする。
JリーグとG大阪が当事者として出てくる。

2014年

- ・埼玉スタジアム、横浜スタジアム（※ニッパツ三ツ沢球技場に訂正）で差別行為が発生した
- ・実行委員会・運営担当者会議において、差別に関する撲滅と資料を配布
- ・資料内にはナチスの親衛隊のマークも出ている
- ・G大阪としては、政治的思想を連想させる可能性があるため、サポーターグループには掲出してない旨をG大阪サイドが話をしていた

2017年4月16日(日)

- ・JR鶴ヶ丘駅からヤンマースタジアム長居に行く途中に、フラッグを掲げ行進するサポーターグループの中に当該マークのフラッグが掲げられた

試合中

- ・フラッグの掲出が行進内であったことをG大阪の首脳陣やG大阪サイドは認識することはできなかった

16日(日)19時頃

- ・クラブのHPに問い合わせ

18日(火)夜

- ・当該フラッグの掲出についてJリーグのHPにも投稿。Jリーグが問題を認識

19日(水)

- ・Jリーグの競技・運営サイドとG大阪が連携を取り合って、G大阪はフラッグを掲出したサポーターグループと連絡し掲載をしないように確認

20日(木)

- ・Jリーグの役員が認識
- ・前日の夜に従業員が認識したものの報告を受けた
- ・G大阪も謝罪文をHPに掲載

21日(金)

- ・山内社長から電話で経緯の報告を受けた
- ・21日のナイトゲームである大宮戦で、すべてのフラッグの掲出禁止を決定
- ・G大阪はサポーター代表と会議を行い、特定者の確認

23日(日)

- ・G大阪がサポーター代表と会議を行っている

- ・ 当該サポータークラブの解散届け出を受け取った

24日(月)

- ・ 山内社長が私のところに訪ねてきて、サポーターグループだけではなく、該当者も確定したと報告
- ・ 経緯の説明と同時に、サポーターメンバーの無期限入場禁止を通告

27日(火)(本日、理事会)

- ・ 一連のG大阪の事実経緯と合わせて、欧米に拠点を持つ法律事務所からは、本件がどういう意味を持つのか、ヨーロッパにおいてどの程度センシティブな問題なのか指摘があった。
- ・ DFB(ドイツサッカー連盟)がホームページにおいて警鐘を鳴らしていることや、リーガに所属するドルトムントの啓発活動やシャルケの問題に対する措置など、具体的なことも挙げてもらった。ドイツ国内では法律違反であることも含めて情報が共有された。
- ・ G大阪からは、スタジアム運営や応援のあり方や関するプロジェクトチーム発足についても理事会で共有があった。ガンバ大阪とファン・サポーターが共同で応援のあり方を検討し、改革するためのプロジェクトチームを発足するもの。詳しくはこの理事会の後にクラブが開示するが、ここでも内容をご紹介する。

以下の3点から構成

1. 応援のコンセプトづくり…応援綱領の作成。G大阪の応援の基本的な考え方をクラブとサポーターで作りあげていく。選手を鼓舞する。迫力のあるオリジナリティある応援で、楽しく選手とサポーターが一体となるスタジアムをもう一度作り直したいという覚悟が表明された。
2. 応援の演出について…クラブとサポーターでアイデアを出して決定。横断幕、フラッグ、応援歌などの作成、選手紹介、音楽、照明もクラブとサポーターが共同して考えながら決定していく。
3. クラブとサポーターによる継続的な改善…定期的に応援についてクラブとサポーターが協議し、継続的な改善を図る。

今回のケースを契機にG大阪としてもう一度やり直したいという表明があった。全体を通しての認識は、DAZNによる試合中継は国際放映権のサプライセンスとしてJリーグの一部の試合がドイツ国内でも放送されている。2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは世界中から海外の方がおみえになる。先に発表したとおりJリーグはドルトムントと試合をする事を決定している。本件は、環境変化とともに、こうした問題におけるセンシティビティも大きく変わっていくという認識を共有した。今まで日本では大きな問題ではなかったということではなく、背景をしっかりと理解をして、啓発と理解をサッカー界が率先して進めていくべきだという話が理事会でもなった。

クラブだけではなく、Jリーグとしてもナチズムという問題についても啓発努力を継続していく。解釈上、このマークは似ている、といったようにグレーゾーンが非常に大きくなる案件のため、禁止の凶柄はこれ、といった表層的な問題ではなくて、背景理解を含めてきちんとクラブとファン・サポーター

が向き合って話をしていこうということが、G大阪の提示した考え方のステートメントだった。G大阪のこうした考え方を他のクラブにも踏襲しながらやっていこうということが理事会で共有された。全体の認識として、ナチズムは国際世論でコンセンサスが得られた政治的なメッセージであり、差別的な要素を含む内容である。Jリーグや日本サッカー協会が掲げる、政治的因素や差別的因素をスタジアムから排除するという項目に関して、繰り返されてはならないという認識を持って共有した。

G大阪の案件に派生する形で、一昨日の AFC チャンピオンズリーグ水原 vs 川崎Fにて、ファン・サポーターがスタジアムから退出できなかつたという、スタジアムの安全性を損なうような問題があり、意見交換をして情報を交換した。

旭日旗は政治的なメッセージ、差別的なメッセージを含むものではないという前提を認識があり、政府もホームページ等で開示している内容ではある。その中で我々が留意しなくてはいけないのは、選手やチームを鼓舞する、激励するために応援をしていただくということ。スタジアムでお客様が安全に観戦できることを守っていくことが大切となる。どの様なフラッグ、掲出物であれ、留意しなくてはいけないのは選手の安全性やファン・サポーターが安心して観戦できる環境をつくるということ。それに向けて継続して努力していくことを共有した。このような案件について、本日は時間をかけて議論させていただいた。

これらの案件の他、Jリーグは大幅な組織変更をした。社内の幹部がほぼすべて変更となった。クラブサーベイとして、クラブの経営者に対してJリーグのパフォーマンスについて無記名でアンケートを行った。メディアの皆さんにご協力いただいたような内容に相当する。結果を開示しながら、今後の具体的な改善ポイント、組織変更について共有させていただいた。また、シーズン制の議論について、将来構想委員会実行委員会で共有されているレベルについて共有した。今後、実行委員会、分科会等で丁寧に議論しているということを何かを決めているものではないが、共有させていただいた。

〔質疑応答〕

Q: G大阪の件について。事象があったという報告を受け、Jリーグとしてクラブに対しての処分があるのか、また今後あり得るのか。またACLでも問題が起きたが、川崎Fに対してAFCから処分がJリーグに届いているか。

A: 村井チエアマン

G大阪の件の最終的な報告は4月24日(月)だった。今後の対処については現時点では決まっていないが、今後検討していくことになる。ACLの水原 vs 川崎Fの件はAFCの主管試合で我々はピッチ上の問題についてコメントする立場にはない。Jリーグには具体的なものは届いていない。

Q: G大阪の件について。浦和の際(2014年「ジャパニーズオンリー」)のスピード感と比べると遅いのでは。原因はどこにあるか。

A: 村井チエアマン

情報がトップに伝わるスピードが非常に遅かった。16日の試合で、私が認識したのは20日の夜の会食中だった。問題に対するセンシティビティーがやや欠けていた。理事会の場でもなぜこんなに遅れたのか、G大阪と共有した。「フラッグで埋めつくそう」という施策が行われた中で、内容というより、運営上の動線やお客様の行動面に気をとられていたということで、試合中に発見することが出来なかつたということ。翌日17日にメールで入ってきたのが1件で、他にもいろいろなものがあつたために問題視することをせずに、18日、19日となってしまったということ。リーグに情報が入ってきた19日に照合した際、これは放置できないということで20日に報告があった。つまり、初動に対するセンシティビティに欠けた。クラブにあってもリーグにあっても大きな問題と認識しなくてはいけない。

サポーターグループは早々に特定できていたが、クラブとして旗を掲げた人が誰かを特定し、その意図を確認するところまでは時間を要しリーグへの報告が24日までかかってしまった。クラブだけでなく、リーグも19日に認識した後のエスカレーションがややスピード感に欠けた。全体として、この問題に対する緊張感、センシティビティの欠如がある。

今回の問題そのものに対する対応については、G大阪はサポーターグループの解散や次の大宮戦でフラッグ掲出禁止ということを矢継ぎ早に打ち出し、G大阪が主導をとったので、スタジアムでの安全性(を損なうこと)や、クラブでの再犯のリスクが起きにくいということを相対的に判断した。総合的にそうした理由があった。

Q: 「ジャバニーズオンリー」やサポーターがバナナを掲げたような事象は、日本人でもわかりやすく、すぐに対応できたが、ナチズムはいけないものだということはわかっており鍵十字はダメだということはわかるが、「SS」のマークはミリタリーオタクでないとわからないという意見もあり、微妙なラインである。Jリーグが規則として縛るのはおかしいと思うが、ドイツで行っているような政治的によくないマークを示すようなガイドラインを作ることは考えているのか。

A: 村井チエアマン

理事会の議論では、おっしゃるところがポイントだと考えている。我々の認識と世界の認識がずれ始めている。ネット社会で、国家間で人の流動性が高まっている中、またサッカーは国際試合が多い中で、我々の認識で問題ないと思っていることが、世界では全く通用しなくなっている。我々自身が環境変化を自覚して、サッカー界としても社会に伝えていく役割がある。それが我々の責任である。

センシティビティーやスピード感に欠けた背景には、我々の問題意識が世界と比べると甘かったのかもしれない。それで良しとせずに啓発努力をしていくことが理事会の総意。しっかりやっていく。

Q: 「明治安田生命Jリーグワールドチャレンジ」についてこの2チームを呼ぶにあたって、ここに落ち着いた経緯は。また「ワールドチャレンジ」という名前に込めた想いは。

A: 村井チエアマン

Jリーグ側では親善試合ではなく、Jリーグの看板を背負って戦うチームを設定しようということで、リーグ戦覇者、カップ戦覇者を設定した。この2つのクラブのスケジュールと、ヨーロッパの5大リーグの中で、トップレベルをグルーピングして先方のスケジュールを確認した。高い競技力、本気で戦うというコミットメントがあること、日程調整で合致するところということで、2チームとなった。あくまで結果論としてだが、香川選手が所属している、清武選手在籍していたクラブとの対戦となつたが、上記のマッチメイクの議論があつての決定である。

「チャレンジ」という言葉について。「チャレンジか」ということもあるかもしれないが、我々はいつも世界に対してはまだまだチャレンジする立場。FIFA クラブワールドカップで昨年、鹿島が非常に良い試合をしたが、コンスタントに、恒常に勝ち続けられるかと問われると、まだまだ余地がある。大会担当者より補足はあるか。

大会担当者 川崎

チャレンジの言葉の意味は、村井がお伝えした通りであるが、大会としては「チャレンジ」ではなく「勝ちに行く」ことを強調したい。昨年の年末に鹿島がレアルマドリードに対して素晴らしい試合をしたように、今回の試合でも勝ちに行くことが課せられていると思っている。この2クラブだけでなく、リーグとしても、クラブが良い試合をして、多くのお客様がこれらの試合を楽しんでいただけるような大会にしたい。

村井チエアマン

担当が申し上げたとおり、キーワードは「勝ちに行く」。クラブワールドカップでレアルマドリードと戦い、鹿島の選手らから発せられた最初の言葉が「悔しい」というものだった。本気で勝ちに行く、ということをやった人にしかわからない世界との距離。ACLでも、出場する4クラブが本気で勝ちに行くというベクトルが合ってきたように思う。ワールドチャレンジでも、勝ちに行くということをベースに置きながらやっていきたい。

Q: 詳しい契約内容は開示できないと思うが、主力の来日は多少約束されているのか。

A: 村井チエアマン

もちろんである。

Q: 川崎Fの件だが、具体的なものはJリーグに届いていないようだが、AFCの公式ホームページでは他の2クラブと併せ、処分を検討するための手続きを開始する旨の発表があった模様。それに対するような認識を持っているか。

A: 村井チエアマン

まだ具体的なものは確認していないが、AFCサイドはクラブに通達する可能性がある。それを受けてから、我々としてどう対応するかクラブを交えて議論していく。今は具体的なことはわからない。

【その他】

村井チアマン

補足となるが、先日、NTT ドコモ様の決算発表会見があり、docomo 経由で DAZN に約 45 万人が加入したとの発表があった。この数字には DAZN に直接の加入は含まれていないものの、シミュレーションした際よりも良い数字が発表されている。なお、(直接の加入を含む)全体の加入数は未公表となっている。

了